若者支援における主体形成に向けたナラティブ・アプローチの可能性
－摂食障害事例との面接過程の分析に基づいて－

○　立命館大学大学院・日本学術振興会特別研究員　　安藤　佳珠子（8139）

キーワード：若者支援　ナラティブ　主体形成

１．研 究 目 的

本報告の目的は，現代の若者支援における主体形成における自己の解放の意味の検討にある．近年，学校から仕事へのスムーズな移行が困難な若者が多くなった．雇用，教育・訓練，家族形成，住宅，医療，社会保障などの既存のセーフティネットが現状に対応しきれず，十分に機能できなくなりつつある．さらに，競争主義の激化や情報化，若者文化の多様化を背景とし，現代の若者の生育過程の特徴として安定した人間関係構築の困難さが指摘できる.他者との不安定な人間関係は特定のカテゴリの若者が対象となるのではなく，若者全般が対象となり，なかでも対人関係を苦手とする若者への支援が必要とされるようになった．こうしたなか，若者支援が実践的にも政策的にも求められるようになり，社会福祉実践においては，主体形成を視座とした若者支援および研究が展開されている(山本，2009).

主体形成はわが国の社会福祉実践において重要な位置を占め，自己の解放はその軸に位置づいてきた．主体形成は，当事者が自らの生活状況を社会に問い発言し，社会をつくる主体者となることを目的としてきた．さらに，自己の解放は自己疎外要因との主体的な対峙を通した新たな自己の創造を意味する．社会福祉実践は時代が変わっても，常に社会に接近するものである．実践哲学や理論は変わらずとも，社会が変化することによって，対象者が異なることによって,その実践がもつ意味や意義は変化する.自己の解放も同様に，現代社会における意味づけがなされる.

本報告の意義は，現代の若者のオルタナティブな生き方を提示する点にある．高度経済成長期以降の競争主義の激化が社会構造の硬直化をもたらし，若者の生活は学校から仕事へのスムーズな移行によって形成されてきた．しかし近年の若者支援の必要性は，学校から仕事へのスムーズな移行が困難となるなかで生じている．社会構造の硬直化に対する処方箋として,若者のオルタナティブな就労や生活の場が模索されている(佐藤, 2005; 宮本，2007)．自己の解放は多様な自己を社会に位置づける過程で生じる．本報告が目的とする自己の解放の現代的意味の探求は,若者のオルタナティブな生き方の提示に示唆を与える.

２．研究の視点および方法

本報告では，語りの多義性による抑圧や権力性からの解放を追及してきたナラティブ・アプローチを研究方法として採用する．本報告は，社会の硬直化が若者の生活に何らかの

抑圧や権力性をもたらしたとの仮説をもつためである．抑圧や権力性は生活に根づいているため可視化が困難である．しかし，当事者の語りが，社会の支配的なナラティブから，当事者の経験に基づくナラティブに変わるとき，当事者と社会の関係にあった抑圧や権力性の輪郭が可視化され，そこから解放される．この過程は，自己の解放といえる．そのため，ナラティブ・アプローチを，当事者が自己を物語ることによって，自己を取り巻いていた抑圧や権力性からの解放を目的とする手段と定義する．

本報告では，上述の過程を報告者(PSW)が勤務していた精神科デイケア(DC)での担当メンバーA さんへのナラティブ・アプローチに基づく支援過程において検討する．対象者であるAさんは，20代後半の摂食障害の女性である．分析対象は，DC通所開始時のインテーク面接から8カ月間の内に実施された計10回の面接での会話，記録，日誌とする．

３．倫理的配慮

本報告は日本社会福祉学会の「研究倫理指針」に基づき当事者の同意を得て実施した．また個人が特定されないよう，データは発表の趣旨を損ねない範囲で改変，簡素化した．

４．研 究 結 果

Aさんの語りにみる自己の解放を，様々な面をもつ自己の受け入れとみることができる．Aさんは流行のファッションを着こなし，当初，苦しさとは無縁な様子であった．しかしAさんは自己を語るなかで，面接室の外でも苦しさを表現するようになった．ここに量的変化のみではなく，抑圧や権力性からの自己の解放をみる．Aさんのライフストーリーにおける抑圧や権力性は，摂食障害との闘いがあまりにも大きなテーマであったために，他者との関係性を構築するための経験が十分に保障されてこなかった歴史にみることができた． Aさんはこれまで自己と向き合いながら多くの経験をし，様々な可能性をつくってきた．Aさんの語りは「父親が大好きな自己」「苦しさを分かち合える友だちをもつ自己」「各地に友だちをもつ自己」「アルバイトを続けられない自己」「過食嘔吐に苦しむ自己」「摂食障害を払拭する自己」「働ける自己」「夢をもつ自己」「人とのかかわりがわからない自己」「働かないといけないと焦る自己」「恋をする自己」などの多様な自己の語りであった．

そして摂食障害の病者としての語りでは，それらの自己を語りきれないことを感じていた．しかし，多様な自己の可能性を受け止めていくには他者の支えが必要であるが，Aさんは他者の支えが十分に保障されてこないライフストーリーのなかで，多様な自己を受けとめることが困難となっていた．面接でAさんはPSWに対し，何度も現在の自己の評価を求めていた．現在もつ様々な自己を受けて止めてもらい，そして自分自身で受け止めることによって，Aさんはさまざまな自己をあたりまえに表出するようになった．